

三角形の恐怖

海野十三

青空文庫

それじゃ今日は例の話をいよいよすることにしますかな。罪ほろぼしにもなりますからね。そうです。罪ほろぼしです。私の若い時のね。いや艶つぽいことなんか身に覚えはありませんから、アテられるなんて事はありませんよ。それは罪は罪だと思えますよ、今でもね。そうです、もう二十年も昔になりましたようか。先帝陛下が御崩御になって中野の先の浅川に御陵が出来た頃の話なんですよ。

その当時私はW大学へ通っていました。随分若こうござんしたよ。今見たいにこんなにデクデク肥っちゃいませんが、中肉中背という奴で頬つぺたも赤くて、桜の蕾かなんぞのようになん少しくらんでいましたよ。亡くなつた姉のお友達に電車の中なぞで行き合おうと、

「宗夫さんはいつ見てもコドモさんですわねえ」

と懐しがられたものですよ。やあこんな風なことは言わない御約束でしたね。これは失敬。

其のころ私の家は東中野にありました。中野の辺を省線電車で通りますと、淀橋の瓦斯タンクより右の方へ三十度ばかり傾いたところにこんもりとした森が見えますが、あの森の直ぐ下でした。御承知の通り関東一帯に特有な大きい杉の森でして、近所では他のどこ

の場所よりも高い梢こずえを持って、遠方から見ると天狗てんぐの巢でもありやしないかと思われる位でした。私の家は、その塔とうの森と呼ばれる真暗な森と、玉川上水のあとである一筋の小川を距へだてて向い合っていました。どっちかと言うと一寸陰気な、そして何となく坊ぼ主頭うずあたまに寒い風が当たるともいったような感じのするところでした。

ですから学校に居る間は大学生の中にもこんなふざけ方をして喜んでゐる無邪気な奴が居るかと思われるように陽気ようきに振舞っていました。が学校がすんでから電車を東中野駅で捨てて、それから家まで五六丁ほどの道のりを歩いて行くうちにいつとはなく考え込んでしまふのです。帰って来て小川の縁ふちに立ちかぶさるるように拵ひろがった塔の森を仰ぐと今までの快活が砂地に潮がひくかのようにすつと消えてしまつて、眼の下に急に黒い隈くまが出来たような気になるのです。

そうなるといつまでも黙りむつとりとして其の日教わつて来た数学の定理の証明を疑つてみたり、其の頃流行の犯罪心理学の書物に読み耽ふけつたり、啄木たくもくばりの短歌を作つたりしていました。

そんな調子の生活の中から私は遂に一つのトピックスをみつけ出したものです。それは例の犯罪心理学の書物と、自分の勉強している数学との両方から偶然に醜醜うしうしして来たもの

であつたのです。私の考えでは人間が脅迫きょうはくの觀念に襲われる場合に其の対象となるものは、平常其の人間がついとうっかり忘れていたとか、氣をつけていなかったものに偶然注意が向けられた結果、急に其のものに対する注意が鈍くなつて遂に一つの脅迫觀念が萌もえ上つて行くのであつて、其の対象となるものが單純で、且つ至るところに存在しているもの程、脅迫觀念を加速度的に生長せしめるのではないかと思つたのです。いや思つたどころか次の瞬間には必ずそうに違ひないと考えました。そうなるとその儘ままでは抛ほうつておけないような氣がして、早速これを実験して事實の上にも明かな結果を出してみたくなりました。

私はそれから色々と「單純で、至るところに存在するもの」であつて、人間が「うっかり忘れてゐるもの」をあれやこれやと考へて見ました。考へてゆくうちに私は一つの面白い目標に力チリとつき当りました。

「三角形！ そうだ」

三角形は三つの線分で作りあげることの出来る最も簡単な空間であります。私たちのように数学を、しよつちゆう勉強しているものには三角形なんて忘れようとしたつて忘れることの出来ないものですけれど、数学に縁の遠い人なら此の最も簡単な空間であるところ

の三角形をついつかり忘れていかも知れないと思ひました。それに三角形の現わす奇異な感情は、円とか五角形とかのあらわすところとは余程趣きを異にしていて、如何にも我が意を得たる絶好の対象物だと思つたのでした。

私は小さい頃から南京豆なんきんまめの入つてゐるあの三角形の袋が好きでした。駄菓子屋だがしやの店先などに丸い笹ざるの中に打ち重ねて盛りあげられた南京豆の三角形の紙袋を見ると買わずには通り過ぎることが出来ない位でした。あの下の方へ細つそりとした鋭角えいかくはノウノウとした気分である子供の食欲を引きつけずには置かないのです。鋭角と子供の食欲との間には必ずや或る真理が横よこたわつてゐると私は思つていたのです。こんな日頃の感じが今の場合のヒントを与えて呉くれたのかも知れません。兎とに角私かくは「三角形の恐怖」といったようなものを或る人間に抱かせてみようと思ひましたのです。

そうなると思ひ度は試験台になる人間を見付けなければなりません。それからと言うものは学校の行きかえりに「三角形の恐怖」を容易にひきおこしそんな人物を一生懸命で物色したものです。十日ほどの辛抱しんぼうののち私は頃合ひの犠牲者を到頭とうとう見付けることが出来ました。これが例の細田弓之助という人物です。この細田氏の名前が弓之助であることや、其の時三十三歳であつたことは、後に例の新聞記事が出た時始めて知つたような訳なので

した。三十三歳とは見えぬ位、細田氏は私の拝見した当時からふけ込んでいました。背は高くて後を向くと肩が寒そうにいかっていました。別に寒い日でもないのに青い顔に黒いマスクを懸^かけて、私と同じように中野駅におずおずと落付かぬ様子で降り立ったのを見付けたのが、恰^{ちやうど}度例のことを念じてから十日目でした。

私は細田氏が東中野駅の附近に家を持っていて呉ればよいと思いました。其の人が特に其の日だけたまたま此の駅に降りたのであつたら、其の住居の方へ追いかけて見てもあまり遠いところなら私の実験を行う上に於^おいていろいろと不便が感ぜられるに違いありませんでした。が幸にも細田氏はあの駅を下りて私の方とは反対の側に行つたところなんですけれども駅から二丁ばかりのところにあつて可^{かな}成り大きな家を構えて居りました。これは段々わかつた事ですが、細田氏は当^{とうしゆ}主の次男であつて、当主は数年前からここに居を構えていられたのでした。

私はまず此の実験を行うに當つて出来るだけ細田氏の行動を觀察して其の性格を理解したいと思いました。又其の職業も私のように理科や工科の人であつたり、或いは画家であっても困ると思つて細田氏の行く先々にも度々ついて行きましたが、都合のよい事に細田氏は無職で毎日何をするという事もなくブラブラしている身分で、たまに出掛ける先は病

院であったり、買物であったりして、友人も案外少いことが判りました。

大体そんなことが判ると私はいよいよこの犠牲者に対して実験を行うことに取りかかりました。恰度学年試験が漸く済んで一寸一ヶ月の休暇が私に与えられていました。私の探偵したところによると、其頃細田氏は毎朝神田の白十字会病院まで注射をうけに行くということが判っていましたので、私は躊躇するところなく事を始めました。

最初の日は私はわざわざ下町で買い求めて来た正三角形の皮製墓口を犠牲にすることにしました。この墓口を細田氏の歩む道路上に捨てて置いて拾わせようという考えです。私は其の日予定の時間に三角形の墓口を懷中に忍ばせて細田氏の邸の方へ出向きました。細田氏の宏壮な構の前には広い空地があつて其の中を一本の奇麗な道が三十間程続いてその向うに小ぢんまりとした借家が両側に立ち並んでいました。駅へ出るには、細田氏はどうしてもこの道を歩かねばなりません。

神経質な細田氏が病院へ出かける時間は大体午前九時三十分について、必ず其の間には紋切型に氏の長身が太い御影石の門に現われるのでした。私は細田氏に拾われることを信じ乍らも万一他の御用聞きなぞに拾われることをも覚悟の中に入れて定刻二分前に門前十歩ほどの路上に其の三角形墓口を落しておきました。そして直ぐさま身を翻えすよ

うにして門前につづく広い空地の片隅たたずに佇たんで細田氏の姿の現われるのを今や遅しと待つていました。

果して間もなく細田氏は例の力なさそうな姿を門前にあらわすと、スタコラと白い路をすすみ出ましたが、どんな無神経ものの眼にでも気がつかずにいない赤い三角形の墓口はやすやすと細田氏の注視の標まとなり、氏の桐きりの下駄は戛かつと鳴って、三角形墓口の前に止りました。直ぐ拾い上げるだろうと予想した事ははずれて細田氏はステッキでちよいちよいと其の墓口をいじって見ましたが、突然顔をあげて辺りを見廻しました。勿論もちろん私の姿も目に入るに違いなかつたので私はつと横の路次ろじの方へ大急ぎで飛び込んでゆきました。私は細田氏が何か大声をあげて私を呼びはしないかと思いましたが、一向声もきこえず、いつ迄たつても元のように静かでした。

それから五分程過ぎたので私は路次から顔を出して窺うかがいますと、細田氏の姿はもうありませんでした。私はすっかり計画が当たつたのに雀躍こわどりしながら、さりげなく墓口を棄てたところに近付いてみますと、其の墓口は側の溝みぞの中に転みつて居ました。それは多分ステッキで上から押し見て何も入っていないと知るとステッキの尖さきでこの溝へ弾はき込んだものにちがいませんでした。私はとも角も其の墓口を拾い上げて逸いち早く其場を立ちのく

と共に、細田氏の眼底に、この毒々しい赤い三角形が刻み込まれたことを信ぜずには居られませんでした。

斯^こうしておいて其の翌日は、細田氏に三角形の原質的な記憶を呼び起さしめるために同じような時間に出向いて、あれから少しはなれた道路の上に、小さいセルロイド製の三^{さん}角^{かく}定^{じょう}規^ぎを落して置きました。

細田氏は例の如く急ぎ足に出て来ましたが今日は少しも立ちどまりもせず、下駄で蹴とばしもせず、棄てられたセルロイド製の三角定規の側を過ぎて行ってしまいました。その三角定規が細田氏の眼にうつらなかつたのだから、或いはそれが充分意識せられ、私の思いどおりに昨日の記憶を呼び起して不審な気持を抱^{いだ}き乍らも何気なく立ち去つたのであるか、一向判りませんでした。

これでは折^せ角^{かく}の計画も駄目だと思つたので、翌日はもう少し薬を強くきかせることに決心いたしました。このために私は真黒な羅^ら紗^{しゃ}紙^{がみ}を小さい乍らも鋭い角を持たせるように切りぬきまして、其の上に新聞紙から「呪」という字を苦心の末、やつと三つ見付けて来て、これをその三角の片隅に三つの文字が三角形をなすように貼りつけたものを作りました。これを懐にして出かけた私は大胆にも、細田氏の石の門のすぐ前にいかにも目につ

きやすく落しておきました。そのあとで例の路次からいまにも出て来るであろう細田氏の拳動きょんどうを少しでも目から放さないようにしようと思ひました。

この露骨くわだな企ては到頭予期以上に成功したのです。細田氏は門のところへ、ツカツカと出て来るや否や、いきなり飛び上るように身を退いて、例の三角形の切抜きのある地上を見つめたではありませんか。私は一寸残忍性ざんにんせいを帯びた微笑をせずには居られませんでした。細田氏は四辺あたりをキョロキョロと見廻しましたが、身を屈めて例の黒い三角形を取上げると、クルリと後へ向いて再び門の中に消えてしまったのです。それから五分たつても十分たつても其の姿は現われませんでした。

私は思ひの外にうまく行つた事を喜びました。医科の助教連が学用モルモットを殺すときの気もちに似た残虐ざんぎやく的快感に燃え立つたのでした。細田氏が十分間経つても姿を現わさないのは恐らく氏が自分の室にかえりあの呪いの三角形を見て前日のことを思い浮べ外へ出る気にならないのだらうと思ひました。あの分では細田氏は前日の三角定規も確かに認めたのに相違あるまいという事が考えられもしました。あの尖ほそい神経の持ち主が、ここまで来ればもう一寸やそつとでは、此の三角形の脅迫觀念から退れることはできまいという事も思ひ合わせることが出来ました。

科学に縁えんじお遠い人間に、三角形に対する恐怖を抱かせることの出来た私は、もうそれで所信の点を充分確かめ得たわけですから、此所で手を引くのが当り前でした。しかしいつの間によら私の興味はこういう概念的がいねんてきなことよりも、細田氏という一個の人間を操あやつることの現実的興味に変わってしまったものと見えて、私は更にそれからそれへと三角形の恐怖の段取りを進めて行つたのです。それが為めに到頭後に御話するような取返とりかえしのつかない事件をひきおこしてしまつたのでした。

兎も角、それ以来というものは細田氏の病院通いがパタリと中止されました。私は邸前の路地や、空地の片隅に佇んだまま無駄な数日を送りました。表からは勿論のこと裏の木戸からも、細田氏の姿は一寸も現われることがありませんでした。私は今用意して来た恐怖刺戟の種が数日間も氏に供給せられないために、ここまで搬はこんだ計画が途中さまたで妨げられてしまふのではないかと思つて大いに気をくさりましたが、よく考えて見ますと、あれからのちは私自身が手を下さなくとも、細田氏は自分でいつでも到る所、身のまわりに三角形の空間を見出して独りで三角形の恐怖を加速度的に増大させていたに違ひはないのです。

たとえばですね、時計の指針は一日に数十回に渡つて鋭角を形作りします。窓から陽が斜

に入れば三角形の影が沢山出来るわけです。用箋を繰れば、偶然に枠が傾斜をして紙と縁と三角形をなしていることもないとは言ひ切れぬことです。万年筆の尖も三角なら、女のひたいも三角形をなしているのでしょう。それからそれへと限りなくこの最も簡単な空間は細田氏の前に展開して氏の恐怖は地獄を駆けまわっていたことでしょう。

細田氏が家から一步も出ないという事が判ると私は更に手段を講じて氏を又別の方法で脅迫することを忘れませんでした。配達された郵便物の上に無気味な三角のマークをつけることも、少々冒険ではありましたが、やって見ました。これは帽子もかむらず勝手口の傍で草でもむしっているような恰好をすれば、郵便配達夫は何の疑いもなく郵便物を私に手渡して呉れます。また細田氏の窓に三角形の扇を飛ばせて引っかけたり、子供たちに紙でつくった三角形の帽子を被らせて庭で遊ばせたり、いろいろなことを試みました。

しかし折角の試みも細田氏が外に姿を現わさないので、その恐怖がどの位まで氏に影響しているかを明らかにすることは六ヶ敷いことでした。これが活動写真かなにかなら私に変装でもして邸の中に入り込むのですが、それ程大胆な事は出来ない。学生らしい弱気も充分にあったのです。こんな訳で呼べども答えずといったような有様に私は少し興味を失いかけて、邸前の空地にあらわれることも何時とはなしに疎かになって行きました。

ところが長々と育まれて来た呪いは、遂に最後のカタストロフを導き出すことになったのです。それはもう三月も暮れ、四月に入つて学校の授業も一両日中には始まろうという日でした。私は残り少くなつた休暇をせめて一日でも有効に使い度いと思つて珍らしくも、私の先輩にあたる須永助教授を、染井の家に訪うために、少し遅い朝飯をしまうと、東中野駅の方へブラブラと歩いて行きました。あれで三四丁もありましょうか、クネクネとした路を通り切つて其処は駅まで一本道になつているところまで来ましたとき、見るともなしに向うを見ますと、一寸始めは気がつかなくつたのですが、相貌こそやつれたれ常にかわらぬヒョロ長い細田弓之助氏がこつちへセカセカと歩いて来るではありませんか。私は今少しで大きな声を立てるところでした。驚いたことに細田氏はすっかり痩せてしまつて、其の顔は髯こそすつてあるが顔の下にある骨のかどかどがはつきり見えるほど頬はこけ落ち、前よりも三倍も大きくなつたかと思われる其の眼はいやに血走つていました。私は相手が既に私を知っているかどうかを考えました。若し細田氏が邸の前に不審な挙動をして徘徊する私を窓越しにでも見覚えているものとすれば、私が彼に近付いたとき大きな声でも立てられて「この学生は曲者だから、ふん縛れ！」などと喚かれでもしよ

うものなら大変だから、逃げた方がよいと思ひました。それで無くて細田氏が私を例の三

角形事件と結び合わして承知していないのなら、私は平然と狂犬の如き氏の横をすれちがって通るのがよい。たとえ理由なくとも、今向うからやって来る氏の顔を見て逃げ出したのでは錐きりのようになつてゐる敏感な氏は瞬間に万事を悟つて誰彼の容赦なく、忽ち狂犬たちまの如く咬みつくことであろう。そう思うと流星さすがに私も進退しんたいきわ谷まつて、いつの間にか往来に立ち停つたのでした。

其の時でした。不意に横丁から笛と太鼓と鉦しやうとの騒々そうぞうしい破れかえるような音響が私の耳を敲たたきました。と早や私の身体を前に押し出すようにして私の前に躍進したのは、近所の寄席の番組がわりでも触れて歩くらしい広告屋の爺さんで、背中には赤インキで染めたビラを負い腹に釣つた大きな太鼓の前には三角の広告旗を沢山つけ、背中のうしろからのび上つた竿の先に身体を全体を蔽おほうかのように拈ねげてとりつけられた紅白だんがらの花傘の上にも、一面に赤い三角旗を樹たてまわしていました。

私は一瞬間このグロテスクな闖入者ちんにゆうしやに驚かされましたが、直ぐ眼前の敵である細田氏の姿に眼をうつしました。其時アツと思う間もなく細田氏はクルリと背後うしろを見せるが早いか蝙蝠傘こうもりがさを拈ねげたような恰好をして向うへ逃げ出しましたが、直ぐ左手にあつた喫茶店おほあわへ大遽おほあわで飛び込んだものです。

其の姿を一目見ると私は何もかも事情が判ってしまいました。いや何も知らない広告屋の爺さんは、細田氏の恐怖の標まじである三角形の旗を身体中にヒラヒラとひらめかして凱がいせ旋せん將軍しょうぐんの如く向うへ押しすすんで行くではありませんか。私は急に身体が軽くなるのを覚えました。そしてカラカラと笑いたくなりました。

実に其時です。細田氏が今遁にげ込んだ喫茶店から、白いエプロンを締めた女が戸口へ真青な顔をして飛び出して来ましたが、

「大変です！ 誰か早く来て下さーい」

とバタバタ足踏みをし乍ら両腕を頭の上に差しあげてうち振りました。絹を裂くような若い女の声に喧けん噪そうの渦巻の中にあつたような流石の広告屋の爺さんも驚いてあとをふりむくと喫茶店の戸口へ馳けつけました。続いて近所から人がバラバラと飛び出して来て喫茶店の方に集つて来ました。若い女は何か訳のわからぬことを喚き乍ら戸口から家の中の方を指さします。人々はドヤドヤと入って行きました。

これは只事ではない。私はあの中へ飛び込んだ細田氏が出て来ないのが不思議に思われました。しかし次の瞬間には、これは細田氏がどうかしたのに違いないと思ひました。私は又何日かのように残忍性の興味が身体中から噴水のように湧き出て来るのを感じずには

居られませんでした。そうになると奇妙にも勇氣が出て来て、私は脱兎だつとの如く、駈けつける近所の人の袖の下をくぐって、喫茶店の中に飛び込みました。ああ、しかしそれは何という物ずさまじい光景であつたことでしょうか。

この喫茶店の室内装飾は実に奇怪を極めた表現派ようしき様式のものであることが一目見て判りました。其処には不思議な形に割れた三角形がその室の至るところに怪しい立あや体面りつたいめんを築き上げていました。室の壁紙は白と黒と黄との畳一枚位もあろうと思われる三角形ですさまじい宇宙をつくっていました。七色とりどりの酒瓶が並んでいる帳場ちやうばの棚には、これも鋭角三角形でとりかこまれていました。

それよりも一層驚かされたのは此の室の片隅に細田氏が仰向あおもむきに倒れ手足は蜘蛛くもの如く放射形に強直され、蒼白そうはくの顔には炯々けいけいたる巨大な白眼をむき出し、齒は食いしばられて唇を噛み、見るもむごたらしい最後を遂とげていました。驚いたのは、そればかりではありません。細田氏の屍かばねの側には四角なテーブルが、対角線のところから三角形をなして真二つに割れて転ころがつていたのでした。

私ははげしい戦慄せんりつに襲われました。そして三角形恐怖事件に関する今までの悉ことごとくの事柄が浮び出て脳髓のうずいの中を馳けまわるように覚えました。私は、其の三角形に割れたテ-

ブルが、表現派好みの三角形のテーブルを二つ並べ合わせてあったのが転って二つに割れたように見えたのだということを知る余裕もなく、飛ぶように喫茶店を出ると一直線に家へかえりました。そして自分の机の前に身体を投げ出すと共に、此のあさましい試みが生んだ惨劇さんげきの中に、間接ながらとりもなおさず殺人者である自分を見出して、はげしい自責せきと恐怖とに身を震わせました。

それから時計は徐しずかに廻りました。夕方に配達された夕刊には「カツフエで大往生」と題して「細田弓之助(33)が喫茶店『黒猫』で頓死したが、原因は病やみ上あがりの身で余り激しく駈け出した為、心臓麻痺まひを起したものらしい」とあったのです。私は懊惱おうのうのたえ切れない苦しさを少しでも軽くしようと冀ねがつて、昼間出掛けようと思った先輩の須永助教授のところを訪い、一切を告白して適当な処置を教えて貰おうと決心しました。

外へ出てみますと其の日の惨劇を忘れたような静かな夜の幕よとばりはふかぶかと降りていました。例の喫茶店さえ、どこに死人しにんがあつたかというような賑にぎやかさで、陽気な若い男の笑い声が高く大きく街路へまで響いていました。私は少しは気が軽くなって、其の前をすり抜けるように通り過ぎて、駅に出来ました。

染井の須永先生の書齋に通されたのは、もう九時を廻っていたのでした。私は早速三角

形恐怖の試験をはじめるイキサツから今日の惨劇を見るに至るまでの事を緊張裡きんちようりに細々と告白しました。須永先生は短い口髻くちびさきを指ゆびさき尖さきでもみながら静かに傾けい聴ちようされましたが、私の言葉が終ると、低い声で軽々かるがると笑つて、

「君は此頃ちと神経衰弱のようだよ。若い身空みそらで、そんな小さいことをくよくよ心配していると、君の姉さんのような病氣に乗ぜられるかも知れないよ。日本全電力を火山を利用する火力発電に悉く改めてしまおうという大計画を抱いていた日頃の君とも思えないじゃないか。そんなことは心配する必要はちつともないよ」

と言つて呉れました。私は常日頃尊敬する須永先生からこの軽々とした評言を聞くことが出来て喜んだのは当然です。それでも多少の悔恨を持つて家に帰りました。いやまだ少し話の先があるのですよ。

其の翌あくるひ日のことでした。差出し人の書いてない手紙が私宛に参りました。これを母がいぶかしそうに二階の私の部屋に持ちこんで来たときは、思わずハツとしました。多分どこからかの脅迫状でもあろうと思いましたが、たった一人生き残った母親へ心配を懸けたくないと思つたので、それはそそっかしい親友A——の筆蹟にちがいないと話して安心をさせました。

母が階下へ降りてから、早速こわごわ封を切つて見ますと、中には用箋が四五枚綴じた手紙が出て来ました。それは随分と乱暴な筆蹟で書きなぐつてありましたが、文章の最後には差出人の名前がちゃんと出ています。ではありませんか。それに驚いたことは、この差出人は昨夜死んだ細田弓之助其の人なのです。

私は其の手紙をもう焼いてしまったので今日貴方にお見せするわけには行きませんが、大体こんな意味のことが書き綴られていました。

宗夫君。

私の生命は今日に迫っている。それは私には良く判る。そして今を除いては私が君に呼びかける時も又とあるまい。

私は最近になつて君が、昔私の捨てた恋人のたった一人の愛弟であるという事を知ることが出来たのだ。それを今まで知らなかった私は万事にどの位驚き続けたことであろうか。しかし今となつては何事も全て遅いのだ。

もはや御察しの通り私は八年ほど昔、君の姉さんである時子と恋に陥ちていたのだ。私は二十五で、時子は二十だった。二人の恋は偶然なところから結ばれて秘密裡につ

づけられたので私達の間のことは恐らく君の母君とても御存知あるまい。

私は二十五といつても、全くお坊っちゃんであつたし、時子はどうかというとき其の病気の所以ゆえんもあつたのであろうか、年よりもずっと進んだ気持を持つていた。私は五つ下の彼女が私に振舞つた年上らしい熱情を今でもはつきり思い出すことが出来る。

ここへ書くのも恥かしいことだが、無反省な若い心を持つていた私は不図ふとした事から時子の胸の病やまいを知つて驚いた。それと同時に余りはげしすぎるように思われる彼女の熱情がたえられない程いやに思われて来て私は遂に彼女と別れる氣になつた。

忘れもしない今から八年前の今日のことだ。いつもはわざと住居から遠くはなれて秘密な恋を味い喜んだあの佃つくだじま島で私ははつきり切れ話を持ち出した。時子の慨なげきがどんなであつたか、それは想像に委せる。私は時子を砂の上につきたお仆して逃げたのである。其のとき、時子は発作ほつきに襲われて激しく咳せきこみながら叫んだ言葉がある。それは「デルタ、デルタ」というのだ。其のさきは咳がはげしくなつたのでどうしても言えなかつたのだらう。私はそれでも逃げた。しかし彼女が別れのときに苦しい息の下から言わんとした意味はよく私にわかつていた。

デルタというのは君も知つている通り「三角洲」という事だ。私達はこの会合の場

所である佃島が三角洲であるところから、「デルタ」と日頃呼んでいた。

時子の言いたいことは私の心の静まったとき今一度このデルタへ来て呉れ、思い直して是非来てくれということと言いたかったのだ。

しかし私は遂に行かなかつた。私はもつと無邪気な少女を恋の相手に欲しかつたのだ。

私は時子が翌年死んだことを聞いた。それ以来私は何故か非常に憂鬱ゆううつになってしまった。いろいろの名医に診てもらったがどうもはつきりせず、身体はやせる一方だ。私は此の年まで結婚は遂にしなかつた。いやこれにも時子の呪いが被っているのかも知れない。

ところが先月の事だ。私は家の前でつづけさまに三日間、ものこそかわれデルタにちがいなき三角形のさまざまなものを見出さねばならなかつた。私は時子の呪いの総勘定日が近づいたことを知った。いや其の上にならなかつた。時子の顔が窓の外にあらわれたりいろいろと変なことばかりが重かさなつた。時子の顔と思つたのは、その弟である君の顔だという事に臆やがて気がついた。しかし其の時私は、時子の弟が、あからさまに時子の呪いを奉じて私を脅かしつつあるという新しい事実には戦慄しなければ

ならなかった。

私は実に苦しい。君の家も調べさせてわかったから、今日にも突然君を訪ねて一切を話そうかという気にもなつてはいる。しかし面めんと君に向うだけの勇氣は中々起りそうにもない。

今日は朝から七年前のデルタの上で別れたことを思い出していると、どうやら今日は自分が死にそうな気がしてならない。このまま死んでは私の罪が一層重なるわけだから、今のうちに一寸認したためて君へ送つておきたいと思つたのである。

ただ一つ心こころ係がりは、どうして君が時子の呪いのデルタを探し出して私を脅かすようになつたかという事である。しかしこれとて今は聴いても何の役にも立たぬことなのであるが……。

四月九日

細田弓之助

私は此の手紙を読んで呆然ぼうぜんとしました。私が十七歳のときに胸の病で別れた美しい姉がこんな秘密を抱いて死んだとは、始めて聴く事実でした。また細田氏が偶然私の選んだ

試験台であり乍ら、亡き姉を捨てた恋人であつた事は一層不思議なことでした。細田氏は私が事情を知つて、氏を三角形デルタで脅かしているものと死ぬまで思つていたことでしょう。何はともあれ、細田氏の死去しきよがのがれられない呪われた運命の仕業であることを知つた私は、どんなに心が軽くなつたことでしょうか。それからというもの私は見違えるように家の中でも快活になつて何事も知らぬ母親を驚かしたり喜ばせたりしました。あの陰気くさい塔の森さえ暴風雨の前に立つ巨人の像のように雄大に仰がれるようになったことでした。

私の長い話はこれで大体御しまいなのです。が例の癖で最後に一寸だけ言わして貰いたいことがあるのですよ。それはこの話の中で貴方も御氣付きのことだろうと思ひますが、いくら私の姉が上手に細田氏のことを隠していたつて生みの母に一度も疑われずに来たというのは随分おかしなことだと思ふんですよ。私は此の頃ではどうやらこの事件の本当の内容が判つて来たように思ふんです。

私の臆測おくそくが若し間違つていなかったとするならばですね、私はやつぱり細田氏を三角形に脅かして間接に殺したことになるのです。つまり私の立てた説が本当に物凄い価値を現わしたことになるのですね。

あの手紙ですか。あれはあの晩尋ねて行った須永先生が、私のことを大変心配して、どうにかして若い身空の私に元気をつけさせようと思つて、大いそぎであの手紙を創作したのじゃないかと思つています。

それに一つ根拠のあることは、母の話によると、実は姉の生きていた頃、姉は大変須永さんを褒めていて、誰かが悪口を言うとしまいには涙を出して泣いた位だという事です。

あの手紙の中にある細田氏のことというのは実は須永さんの創作にして、且つ須永さん自身の体験の一部を漏してあつたのではないかと思うのです。遺憾なことに須永さんもそれから数年後、英国へ留学して、あの地で奇妙なバクテリアに取憑れて亡くなったので、そんな事に気がついたときにはもう事実を須永さんから聴きただすことも出来なくなつていました。

そうなる私には罪を背負わねばならぬことになりましたが、そんな事はどうでもよいといふ気がしています。いや貴方が今御覧の通り、これで体重が十九貫ありましてね、至極呑気に生きています。昔のような安価なセンチメンタリズムに陥るには、今のところ余りに健康すぎると言うわけなんですよ。ハハハハハハハ。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第1巻 遺言状放送」三一書房

1990（平成2）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「無線電話」

1927（昭和2）年4月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「路地」と「路次」の混在は、底本通りにしました。

入力：tatsuki

校正：ペガサス

2002年10月21日作成

2011年2月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三角形の恐怖

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>